
ノール（M） 「『デオフェアリー・ノールと秘密の部屋』

スマル2 『硫化水素』」

一拍の間

ノール（M） 「わたしの名前はノール。どこにでもいる、普通のデオフェアリーなの！この世界から悪いにおいをなくすため、カルモア学園の学生になって、人間の世界を見守っているんだ」

SE…ノックの音。

SE…ガチャ！とドアが開く音。

エリカ 「おはようございます、お姉様！」

ノール(M) 「この、ノールのことを『お姉様』と呼ぶ騒がしい子は、後輩のエリカ。実はデオフェアリー候補生なんだけど、ノールと一緒にカルモア学園で消臭の任務についているんだよね」

ノール 「どやあ〜！」

エリカ 「どうしたんですか、お姉様？ (困惑)」

ノール 「制服の生地を新しくしたの。新しい制服」

エリカ 「あ、セーラー服ですね」

ノール 「そう。『駄目な人には見えない制服』」

エリカ 「あ〜……わたしの制服も、その生地です。きっと」

ノール 「今、このセーラー服が見えない人は、きっと駄目な人」

エリカ 「大丈夫です、わたしたちがセーラー服を着てるのが

見えないなんて、そんな駄目な人はいませんよ」

ノール 「そうだね、いないね」

一拍の間

エリカ「そういえば、さっき、一階で王子を見ましたよ」

ノール「げ」

エリカ「このままだと、王子がここに来そうな気がしますね」

ノール「後を付けられた!？」

エリカ「いや、もともと部室の場所はバレバレです」

ノール「そっか、そうだよ」

エリカ「とりあえず、見回り行きましょう」

ノール「なんで？」

エリカ「ここにいたら、確実にやってくるじゃないですか。

一階で見たと言うことは、とりあえず屋上とか行けば

大丈夫ですよ」

ノール「すごいね、エリカ。考えてるね!」

エリカ「ほめて下さい、お姉様」

ノール「すごい! なんだったけ? 『策士、策におぼれる』って

ヤツ?」

エリカ「それじゃ、ダメじゃないですか、お姉様……」

SE .. ガチャ！とドアが開く音。

SE .. 数歩、歩く音

バスメル 「おお！ 僕のお姫様が現れた！」

ノール 「わあ!?!」

バスメル 「今日は急いでいて、ノールちゃんのところに行けない

と思ったけれど……まさか、廊下で出会えるなんて！」

一拍の間

ノール 「エリカ、さっきのことわざはココで使えばいいのかな？」

エリカ 「はい。『墓穴を掘る』でもいいです。

お好きな方を使ってください」

ノール(M) 「そんなわけであ……(やる気なさそうに)」

ノール(M) 「この、いきなりうっとうしい、キラキラ二枚目の

お兄ちゃんは『バスマル王子』」

ノール(M) 「いつも、ノールの苦手なクサイ台詞で告白してくるんだけど……そういうの、苦手なんだよね」

バスマル 「運命を感じるよ……ノールちゃんと僕とは、小指と

小指が、目に見えない赤い糸で結ばれているんだね」

ノール 「目に見えないのに、『赤い』っておかしいよね？」

エリカ 「お姉様……身も蓋もロマンもないことを言わないで

ください」

ノール 「だって、目に見えなかったら、赤じゃなくて透明じゃん」

エリカ 「『目に見えない透明な糸』じゃ、そのまんまじゃない

ですか。もっと、ロマンチックな言い方ってないん

ですか？」

ノール 「テグス？」

エリカ 「……もお、いいです。テグスで……(諦め)」

バスメル「いつも、素敵だね……ノールちゃん」

ノール「糸、結び直せないかな？エリカに」

エリカ「やめてください、お姉さま」

一拍の間

バスメル「まぶしくて、あたたかい気持ちになれて――

キミを見ていると、ボクは地球環境に優しくなれるんだ」

ノール「ノールがいなくても、ちゃんとしなさい！」

エリカ「そこ、怒るトコじゃないですよ」

ノール「地球に優しく、ノールに優しく、だよ」

エリカ「だよ、っっていわれても……お姉様は、何か環境に優しい

ことしてるんですか？」

ノール「ノール、ちゃんとしてるよ。スプレ－のガスは、

ジメチルエーテルだし」

エリカ「なんですか、それ？」

ノール「フロンと違って、オゾン層も破壊しないし、温暖化にも影響しない」

エリカ「へー」

ノール「無毒で、空气中に簡単に分解するから、スプレーしても安心」

エリカ「あの、この話は必要ですかね？」

ノール「エリカが聞いたんじゃない！」

一拍の間

バスメル「ああ、名残惜しいけど、もう行かなくてはいけな
いだ」

ノール「はい、それではごきげんよう（棒読み）」

バスメル「寂しいけれど、大丈夫。いつでも、僕とキミはつなが
っているのだから」

ノール「テグスで？」

バスメル「では、また会おう……運命のひと！」

SE…たつたつた……と走る音 (F・O・)

一拍の間

ノール「燃え尽きたぜ……真っ白にな。(あしたのジョー風に)」

エリカ「お姉様、昭和説(ぼそ)」

ノール「なんか言った？」

エリカ「いえ、なんにも」

ノール「とりあえず、どうする？」

エリカ「講堂脇の林に行ってみましょうか」

ノール「そうだね、空気が澄んでそうだね」

エリカ「なんだか、癒しって感じがしますし」

ノール「よし、行こう！」

SE…歩く音 (F・O・)

一拍の間

ノール「とうちやくー」

ノール、深呼吸。

ノール「今日は、空気がさわやかだ」

エリカ「そうですね、100%のマイナスイオンですね」

ノール「エリカ、たまにコメントが適当だよね？」

エリカ「よく言われます……ん？」

ノール「……ん？」

エリカ「下水臭い……お姉様、腐った卵とか持ってますか？」

ノール「持つてるわけじゃないじゃん！これは……悪臭だよ！」

エリカ「なんか、気持ち悪くなってきました、お姉様」

ノール「この硫黄臭——腐った卵にも似た、糞便臭に含まれる悪

臭成分……どこかに、硫化水素があるはずだよ！」

一拍の間

リュウ「ふははははは!!」

SE…それっぽい登場SE

ノール「だれ？」

エリカ「ずいぶんとハイテンションなひとですね」

リュウ「悪臭17人衆のひとり……『硫化水素のリュウ』だ！」

一拍の間

エリカ「硫化水素!? デオアリーナのゲストが、読めなくて良く

詰まっている、あの！」

ノール「なんの話？」

エリカ「悪臭は消臭ですよ、お姉様！」

ノール「話そらそうしてる？」

一拍の間

リュウ「世界を悪臭で満たす第一歩。オレの力で、学園内を糞便

の臭いで満たしてやる！」

エリカ「すごい迷惑！」

ノール「でも、おならし放題だから、いいよね」

エリカ「よくないです！ し放題とか言わないでください！

ヒロインなんですから！」

ノール「そっか……『ノールはトイレ行かないよ☆』」

エリカ「だれに対してのアピールなんですか？」

ノール「おならもしない」

エリカ「……そうですね、しませんね（諦め）」

リュウ「おならだけではないぞ！ 糞便の臭いだからな！」

ノール「糞便!? それは、ばれるよね？」

エリカ「……しちやった場合、ですか？」

ノール「だって、気体じゃなくて固体でしょ？」

エリカ「まあ、そうですね（げんなり）」

ノール「だいたい、ばれる・ばれないの問題じゃなくて、悪臭は

許さないんだから!!!」

リュウ「貴様、何者だ!？」

ノール「華麗に変身！ でおどあーっ!!」

SE…変身SE&BGM

リュウ「な、なにい!？」

ノール「見た目はキュートに、中身は本気！デオフェアリー・

ノール!」

一拍の間

エリカ「変身しま…:…した?」

ノール「なんで、目の前で変身したのに疑問系なの?」

エリカ「いや、絵的な問題というか…:…なんでもないです」

ノール「ノール、華麗にどやっとな変身したよっ!」

エリカ「しましたね！ セーラー服から裸エプロンに!」

ノール「裸じゃない！ パンツはいてる!」

エリカ「だから、アイドルなんですから！ なのためらいもなくパンツとか言わないでください。恥ずかしいですよ」
ノール「じゃあ……『パンツじゃないから、恥ずかしくない』」
エリカ「いいのかな、これ……？」

一拍の間

リュウ「そうか……貴様がアセトアルデヒドのヒデを倒した、

デオフェアリーか！」

ノール「そうだよ」

エリカ「すごい、有名人ですねお姉さま」

ノール「セレブってヤツかな？」

リュウ「おしゃべりは、ここまでだ！……トイレのにおいを、

臭塗ッ!!」

SE…臭塗っばいSE

エリカ「うわ！うん……糞便くさい！」

ノール「うんちくさい!!」

エリカ「だから、お姉さま！ なんのためらいもなく、うん……

とかつて、言わないでください。ヒロインなんですから」

ノール「広告設定はR18だから、大丈夫だよ」

エリカ「これが大丈夫な人は、R18の中でも、選ばれた紳士だけです！」

ノール「じゃあ、エリカ、やっつけろ！」

エリカ「また、わたしですか!?!」

ノール「だって、なんかぼっちいニオイが……ともかく、実戦

経験を積まなきゃだめだよ！」

エリカ「あー、もー、わかりました！」

エリカ「らぶらぶ・ぽっぴんぱんっ!!」

SE…三角飛びで蹴り飛ばす音

リュウ「ぐはあ!？」

エリカ「やっつけた！」

ノール「こらーっ!! スプレー缶もって、三角飛びで蹴り倒すの

禁止っ!!」

エリカ「え？ でも、かつこよかったですよ」

ノール「自分で言うなー！ ていうか、キックするのにスプレー

は何の関係もないよね？」

エリカ「そこは、気分の問題ですよ」

ノール「だいたい、跳び蹴りとか良くできるね？」

エリカ「言わなかったですっけ？ わたし、合気道やってるん

ですよ」

ノール「合気道に跳び蹴りとか、ないよね!？」

一拍の間

リュウ「く、くそお……」

エリカ「こんどはお姉さまがトドメを！」

ノール「よし、いくぞー！」

一拍の間

ノール「らぶらぶ・ぽっぴんぱんちっ!!」

SE：らぶらぶ・ぽっぴんぱんちのSE

リュウ「うわー、だめだー!!（棒読み）」

SE：悪臭退散のSE

ノール「いえいつ!？」

エリカ「やりましたね、お姉さま」

ノール「やった、けど……」

エリカ「どうしたんですか？」

ノール「トイレのニオイって、硫化水素だけじゃないんだよね。

いろいろな原因物質があるんだよ」

エリカ「そういえば——『糞便』だけでもんね、硫化水素は」

ノール「コレが最後の消臭成分とは思えないんだよね」

エリカ「単純計算で17ひく2は15残ってるってこと、ですもんね」

ノール「よし、まだまだ頑張る！」

エリカ「がってんだ！」

ノール「だから、何なの？ そのキャラ??」

一拍の間

? A「アセトアルデヒドに続いて、硫化水素までもが……」

? B「だが、2人は17人衆の中では小物。次こそは、この俺が

……!!」

? A「期待しているぞ——ノリ」

? B「ははっ！」

一拍の間

エリカ (N) 「こうして、硫化水素は消臭された」

エリカ (N) 「しかし、これで終わりではない」

エリカ (N) 「糞便だけで良いのか？ 尿はどうした？

そして、最後の意味深な会話は一体……？」

エリカ (N) 「デオフェアリー・ノールの、消臭は終わらない…

…」

一拍の間

エリカ (N) 「漂う悪臭を、なんとする」

エリカ (N) 「芳香剤では、ごまかしきれぬ」

エリカ (N) 「換気扇でも、どうにもならぬ」

エリカ (N) 「マイクログルで、消臭する」

エリカ (N) 「また、来週も……」

ノール (N) 「『デオ・デオドアー！』」

おわり。